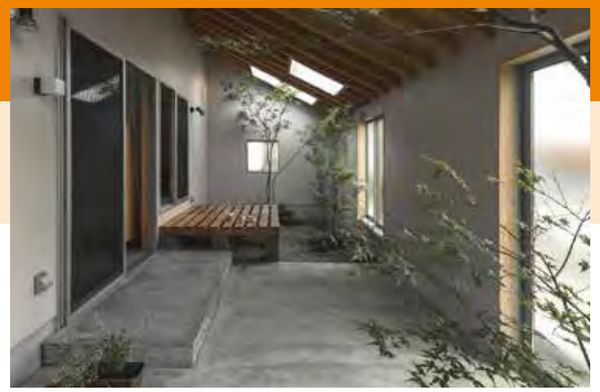
新築住宅部門

最優秀賞



原 浩二

原浩二建築設計事務所

【作品名】お庭リビングの家

設　　計	原浩二建築設計事務所
施　　工	株式会社 御船組
竣 工 日	2020年3月28日

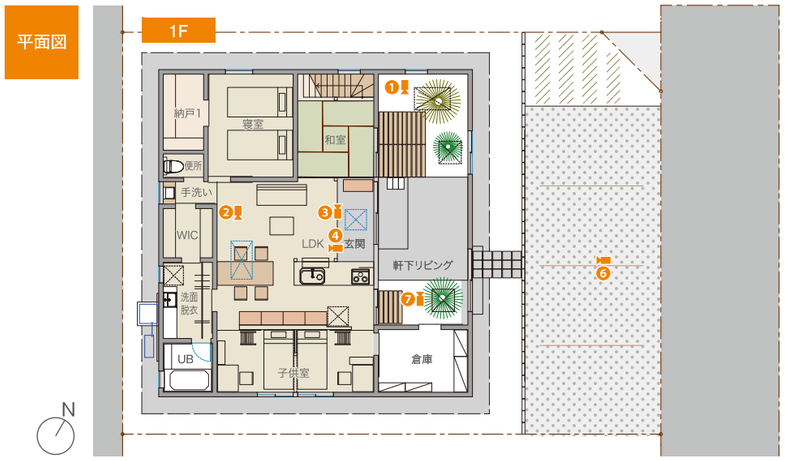
⊙建物概要

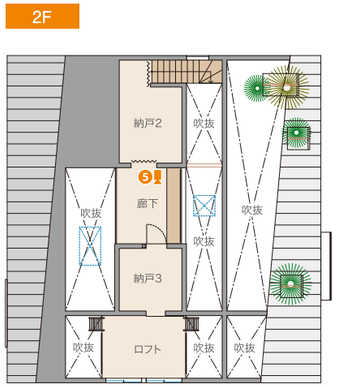
建 設 地	島根県出雲市	延 床 面 積	139.48㎡
敷 地 面 積	245.79㎡	構造・規模	木造2階建

⊙設備面の特記

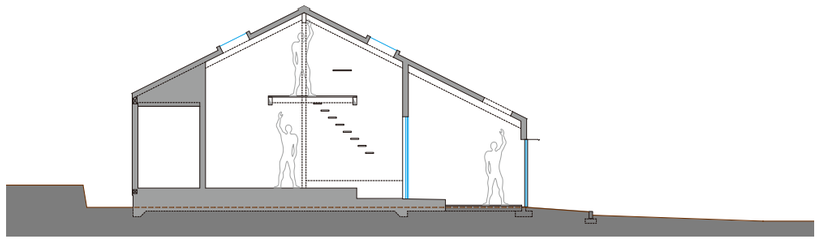
厨 房 機 器	IHクッキングヒーター
給 湯 機 器	エコキュート
冷暖房機器	エアコン

平面図





断面図



❶❷❸❹庭を屋根、壁、サッシで囲んで内部化する事で、より使い勝手の良い、気持ちの良い庭になるのではないかと考えた。本来開放的であるはずの外部を内部化し、日々の生活との距離感が縮まり、より外部的な生活様式の幅を増やした。

❺2階フリースペース+吹抜空間。階高は極力抑えて気積を最小限にするとともに、シーリングファンや天窓へのロールスクリーンによって熱負荷を軽減。
❻周辺に対しクローズした設計としたが、二つの引違い窓の開閉によって近隣と一定の関係性を確保。
❼引違い窓を開けると周辺との繋がりが生まれる。

設計コンセプト

ここ近年、山陰島根のそれなりに厳しい気候風土の中でどのような建築をつくったら良いのかを漠然と考えています。そのひとつに外部空間のつくり方、屋根と建物の関係性があります。
施主様から「中庭やデッキテラスがほしいな…」という要望が年々増えてきている気がしますが、そこには家族や友達との理想の週末や近隣とのプライバシーの関係性などが見え隠れしています。それに対して考えるのは「無防備でオープンな外部空間は決して有効な使い勝手を産まないのではないか」ということです。夏場の厳しい日差し、その他の季節の雨の多さ。庭を屋根、壁あるいはサッシで囲い込んで内部化することでより使い勝手の良い気持ちのいい庭になるのではないか?本来開放的であるはずの外部を内部化することで、むしろ生活との距離感が縮まってより外部的生活が増えてくる気がしています。
もう一つは動線との関係です。多くの場合、玄関からLDK、その先に中庭やデッキテラスがありますが、それだと日々外に出ることがあるのだろうか?せいぜい洗濯物を干すくらいではないだろうか?と思えてきます。しかし中庭やデッキテラスを動線の中に組むことでもう少し生きた空間にすることができるのではないか、具体的にはその空間を通って家への出入りをするだけでも日々の生活の一部になってくれるのではないかと考えています。
他にもキッチンとの距離感や閉じ過ぎることでの近隣との関係性などその都度考えるべき事柄はありますが、この一年の世界の混乱の中、人々の営みの空間をいかにつくるべきかを重ね合わせて考えるタイミングの住宅になりました。

審査委員講評

日本古来の民家を彷彿とさせる、実にシンプルな平面・断面計画の住宅です。「お庭リビング」の提案は、とても魅力的で新しい考え方です。屋根の下の半外部空間は、季節によって、天候によって、時間帯によって様々な利用が考えられ、使用頻度の高い素晴らしい場所となることでしょう。常に独自の設計手法を追求してこられた設計者の力量が垣間見えます。

リフォーム
住宅部門

最優秀賞

キノシタヒロシ

キノシタヒロシ建築設計事務所

【作品名】小さな図書館のある家

設　　計	キノシタヒロシ建築設計事務所
施　　工	井筒左官・UKP
竣 工 日	2019年11月

⦿建物概要

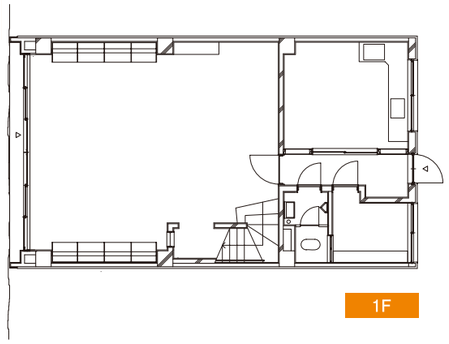
建 設 地	鳥取県鳥取市	延 床 面 積	131.16㎡
敷 地 面 積	80.77㎡	構造・規模	RC造（既存）

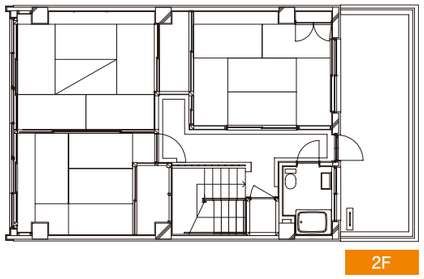
⦿設備面の特記

厨 房 機 器	ガスコンロ
給 湯 機 器	ガス給湯器
冷暖房機器	エアコン

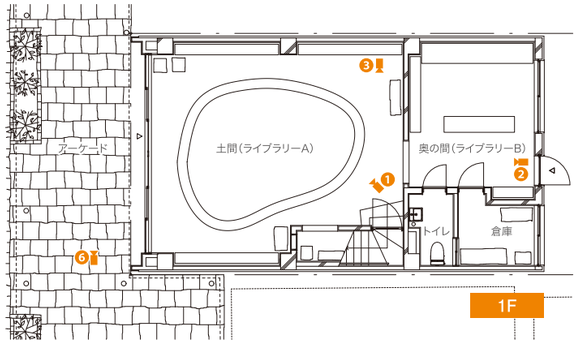
平面図

リフォーム前





リフォーム後



❶円環状のベンチは土間や客間として、あるいは気の合う仲間や家族で団らんするようなパブリックなリビングのように使われる。
❷奥の間にもたくさんの本が収蔵されている。

❸右側の本棚には絵本を収蔵。既存天井を取り払い、アーケードと天井の高さを揃えることで、軒や縁のような雰囲気が現れる。
❹上階はワンルームとし、両側の大きな開口からは気持ちの良い陽光が入り、簡単に風が抜ける。最小限の改修に留め、自分たちで屋上に花壇を設けるなどして楽しむことを選んだ。

❺高い天井、広い一室空間。東京のマンションでは得られない住空間が好まれた。
❻1952年に施行された耐火建築物促進法の最初の適法として、目抜き通りの両側に防火建築帯が建造された。周辺には同じ規格の鉄筋コンクリート造の家屋が建てられ、今回の敷地もそのうちの一つである。

設計コンセプト

たくさんの本をお持ちで、その収蔵場所も兼ねた住まいを考えていた施主に、単に書庫としてだけでなく、気が向いたら私設の図書館のようにして街に開くことができる住空間としてはどうかと提案し計画が始まった。
入口にあった6枚のガラス戸はそのまま転用することとし、1階はアーケードから続く土間や客間として、あるいは小さな図書館のような開かれた場所にもなる。円環状に設けられたベンチはその様々な場面で使われる。
上階は躯体が持つおおらかさを存分に活かして施主の好みでもあるワンルームとした。また、設備を最新の高効率機器に取り替えた以外は、建築全体として大きな費用は掛けず最小限の改修に留めた。
東京と鳥取の2拠点でカフェやギャラリーを運営する施主は、東京のマンションでのふたり暮らしをやめ、鳥取の街で自分たちらしく生活している。この街で得た新しい共同体の形成にこれからの家族の有り様が示されているように感じる。
この市街地は1952年に起きた鳥取大火により街中が焼けた。復興の際、同年に施行された耐火建築物促進法の最初の適法として、附近にある目抜き通りの両側に防火建築帯が建造された。同時期に周辺には、それとほぼ同じ規格の鉄筋コンクリート造の家屋が建てられ、未だにその多くが現存している。今回の敷地もそのうちの一つである。
躯体の1階の天井高さはアーケードと同じ3500㎜、2階は3400㎜と防火建築帯とほぼ同じであり、またそれは一般的な家屋の躯体と比べて遥かに高い。
この空間スケールはアーケードと同じく、大火以降から経験されてきたこの街特有のスケールであり、地域の共同体の活動を支えて来たであろう。施主の描く新しい共同体の形成の器として、これらを評価し積極的に設計に取り込んだ。

審査委員講評

この地域で起きてきた時間の記憶を継承する器と新たな施主。その両者と対話しながら実空間として仕立て上げた設計者の技量が秀逸でした。個人の趣味が街へ滲み出ていてふらりと立ち寄りたくなる新しい住まいのカタチを感じました。中央の円環の柔らかい形態は通りがかる人が気軽に腰掛けることをアフォードしており、既存躯体のラスティックさと合わせて心地よさを作り出しているように感じました。

新築住宅部門

優秀賞

藤森 雅彦

藤森雅彦建築設計事務所

【作品名】CHRONOS DWELL

写真撮影／小川 重雄

設計	藤森雅彦建築設計事務所
施工	積和建設中国 株式会社
竣工日	2018年9月30日

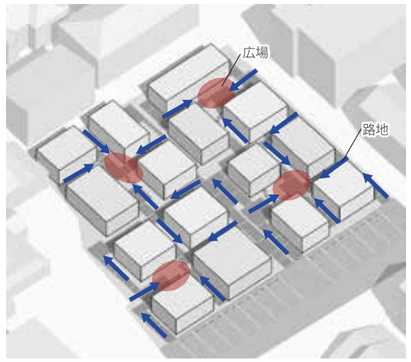
⊙建物概要

建設地	広島県広島市	延床面積	1092.07㎡
敷地面積	1552.4㎡	構造・規模	木造・地上2階建

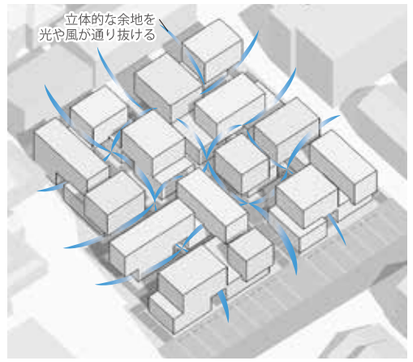
⊙設備面の特記

厨房機器	ガスコンロ
給湯機器	ガス給湯器
冷暖房機器	エアコン

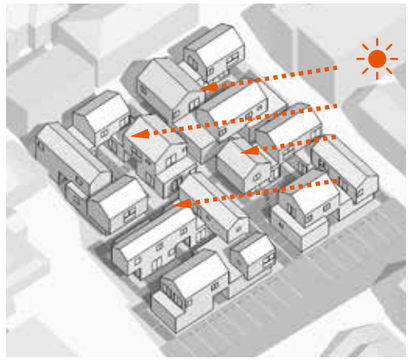
平面図



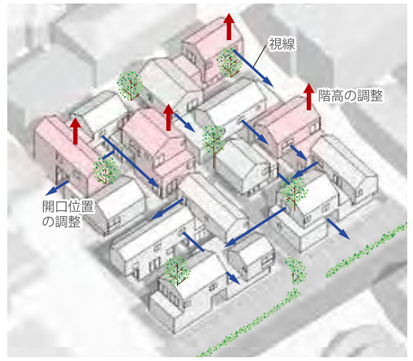
①ボリュームを周囲の2階建の建物より少し小さくし、住宅群となった際の圧迫感を軽減。



②1階とはずらしながら2階のボリュームを配置し、通風を確保。



③街並みとの調和と採光のために2階のボリュームを切妻状の屋根に切り取る。



④一部住戸の階高、開口位置の調整、また植栽により視線の抜けをコントロール。

❶戸建てのような独立性の高い長屋を実現しすべての住戸で4面採光・通風を確保。
❷外壁はガルバリウム鋼板素地、一文字葺き。時間や天候によって様々な表情を写し出す。入居者が入れ替わる賃貸アパートにおいて、広場と路地による弱い境界線がコミュニティの形成に寄与する。
❸階高の調整によりロフトスペースが生まれ、利用価値の高い空間となっている。

写真撮影／❶❸小川 重雄 ❷藤森 雅彦

設計コンセプト

広島市の北部に位置する敷地。かつては住宅地に農地が多く点在していたが、徐々にその数は減り、市街地へのアクセスや周辺環境のよさから子育て世帯の増加に伴い、人口の高密度化が進むと予想されるエリアである。
計画地は農地を全15戸の賃貸アパートとして転用したもので、容積率160%・建蔽率60%の敷地に対し、それぞれ70%・45%前後の密度に抑え、余地が入居者の生活に寄与し、賃貸アパートとしての付加価値を生み出す計画とした。
まず、全15戸を4つのコミュニティ単位に分割し、接地階では各住戸が“広場”に面し、それを“路地”でつなぐようボリュームを配置した。次に、2階のボリュームは接地階とはずらしながら配置していき、ずれによって生じた部分を各住戸の専有テラスとして利用している。住戸間の視線の交錯は一部住戸の階高の調整や植栽の配置などにより軽減しており、調整によって生まれた室内スペースをロフトとし、入居者にとって利用価値の高い空間となっている。間取りの異なる各住戸でメゾネット形式を採用することで戸建て住宅のような独立性の高い長屋を実現し、全住戸で4面採光・通風を確保している。
また、外壁はガルバリウム鋼板素地、一文字葺きとした。時間や天候によって様々な表情を写し出し、この場所にしかない固有の新たな風景と空間を生み出している。
“広場”と“路地”というこれまでにあった空間手法を用いながらも、内外に多様な場が生まれる計画により、住戸同士の新たな関係性を試みるだけではなく、住まいとしての根幹である居住性・快適性を獲得し、これまでにない空間体験を生み出している。

審査委員講評

コミュニティとプライバシー、変化と統一、独立性と連続性等、低層集合住宅に求められる、様々な相反する概念を重層長屋の形式と広場と路地の建築手法で丹念につくり上げた作品。個を優先すれば群が犠牲になり、群を優先すれば個が犠牲になりがちですが、抜群のバランス感覚と丹念な検討、つくりこみで両方の成立に成功しています。

リフォーム住宅部門

優秀賞

大野 晋平

大野晋平建築設計事務所

【作品名】山崎の家

設計	大野晋平建築設計事務所
施工	株式会社 SAKULAB（サクラボ）
竣工日	2019年8月28日

⦿建物概要

建設地	岡山県岡山市	延床面積	127.79㎡
敷地面積	不明	構造・規模	木造平屋建

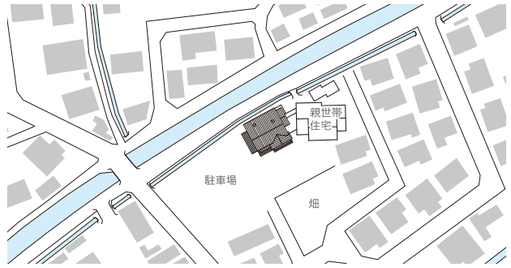
⦿設備面の特記

厨房機器	ガスコンロ	
給湯機器	エコジョーズ	
冷暖房機器	エアコン	床暖房

before

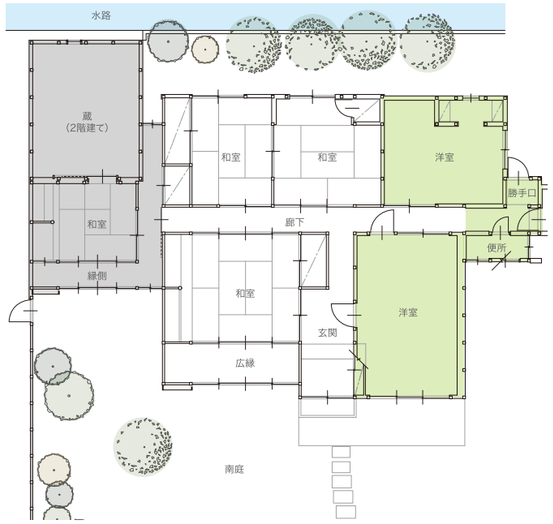
after

付近見取図



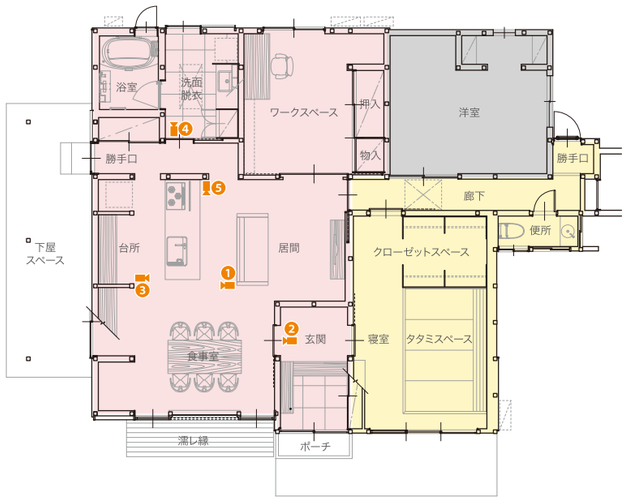
平面図

リフォーム前



N

リフォーム後



改修済（約20年前）部分　改修後解体部分　全面改修部分　表面改修部分　既存のまま

設計コンセプト

岡山市に建つ築50年ほどの住宅。約20年前に親世帯が建てた住宅と繋がった旧母屋の改修プロジェクトである。親世帯の住宅を建築した際に一部を改修、今回が2度目の改修ということになる。ご家族はこの住宅で育ったご主人を含む夫婦+子ども2人（設計時は子ども1人）。出産、子育てを機にこの建築を改修し、近隣のアパートから移ることを決意。ご主人は在宅で仕事をされており、奥様も在宅勤務の時間が長いため、「職」と「住」を融合させる改修が求められた。

改修済エリアは表面改修（仕上変更等）または既存のままとし、玄関を含む西の未改修エリアの全面改修（構造補強、温熱改修を含む）を基本とし、未改修エリアに暮らし×仕事の主となる空間を配置した。

本改修のメインは台所/居間/食事室の一室空間。奥様は食事室のテーブルで仕事をされ、ご主人のワークスペースからの風景にもなるため、「職」「住」にとって最も重要な空間がこの一室空間である。ここからは南庭、その奥にご両親が手入れする畑が見える。この風景を感じながら日々を過ごしてほしいという思いから、視線を誘導するために天井は南に向けて下がる勾配天井とした。既存軸組内に納まるプロポーションを検討し、任意で天井棟ラインを設定したラワン合板による切妻型の天井としている。一方で既存柱を撤去し、新設梁で補強した居間スペースはフラット天井として、一室空間の連続性、一体性のなかに変化をもたせた。

改修では既存の建築がもつポテンシャルを引き出すことを第一に意識する。今回の改修がそのポテンシャルを活かし、「職」と「住」の融合した家族の暮らしを支え続けるものになることを願っている。

審査委員講評

ゆるやかに折れた大きな天井が実に美しく、伸び伸びとした住空間を生み出しています。材料を吟味しながら、プロポーションやディテール、そして採光や色調など、設計の基本に立ち戻り、確実に選定・実施した成果だと思います。家具デザインや配置にもそつが無く、加えて、南庭側の木製建具やファサードにも、設計者のセンスの良さや力量を感じます。

❶居間スペースより食事室、台所をみる。既存軸組内にラワン合板の切妻型天井を納めた。

❷❸床は栗の無垢フローリング、壁は大理石粉からつくられた塗装仕上げ。生活の中心であり、仕事場、休憩・食事スペースにもなるこの空間にはできる限り自然素材を採用した。

❹北側の洗面脱衣には北側開口を計画したが、毎日のスタートとなる空間にしては明るさが足りないと判断し、トップライトを設置。

❺ラワン合板の天井は南際の天井高、天井棟の位置、勾配を熟考。南開口部は家具との相性や庭の見え方、天井や床からの連続性があるようなデザインをめざした。

新築住宅部門

佳作

三宅 正浩

株式会社 y+M design office

【作品名】方杖の家

設　　計	株式会社 y+M design office
施　　工	坂根住宅
竣 工 日	2020年3月25日

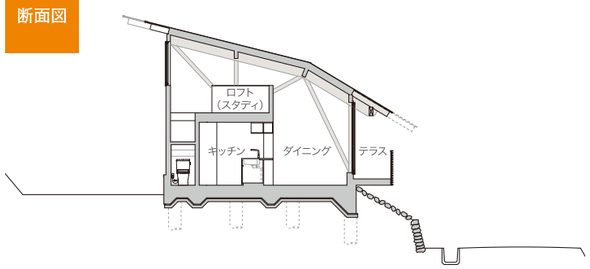
⦿建物概要

建 設 地	島根県邑智郡	延 床 面 積	103.00㎡
敷 地 面 積	474.00㎡	構造・規模	木造2階建

⦿設備面の特記

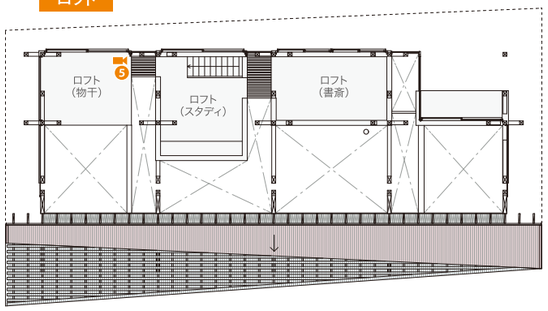
厨 房 機 器	IHクッキングヒーター	
給 湯 機 器	エコキュート	
冷暖房機器	エアコン	薪ストーブ

断面図

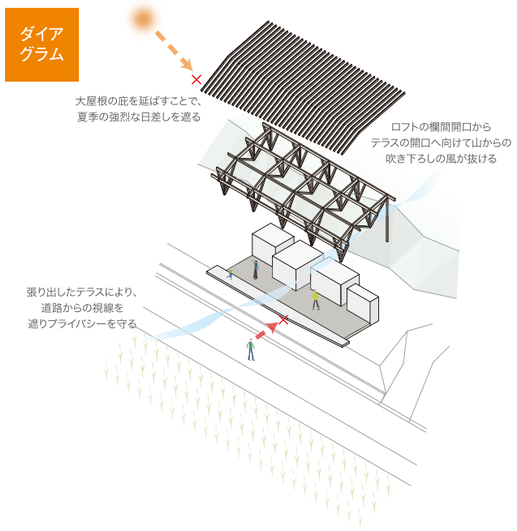


平面図

ロフト



ダイアグラム



❶建具を開けると全てつながるワンルームの大空間。プライバシー性を高めながら、はねだしたテラスにより周辺の自然環境を屋内へ取り込む。
❷実面積以上の広がりを感じる空間。子どもたちの成長に合わせて変化する。
❸西へ向かうほど大きく伸ばした屋根により、西日を抑えるとともに涼風を受け止める。明るく開放的な空間のため日中は照明を使用しない生活が可能となり、屋根の下にいながら季節や時間の移り変わりを感じることができる。

❹大空間をあたためる薪ストーブ。燃料の薪を裏山で採取し、資源を有効活用すると共に環境配慮につながる。
❺やわらかく仕切られた3つのロフトスペース（物干、スタディ、書斎）

設計コンセプト

島根県の中山間地域邑南町に建つ、夫婦と子ども2人の4人家族の住宅である。東側に主人の両親が住まう母屋があるが、周辺には住宅が少なく、棚田や山林が広がる自然豊かな敷地である。周囲の自然環境とふれあうシンプルな生活がしたいとのクライアントの要望により、建具を開けると全てつながるワンルームの空間に水まわりや収納などプライバシー性の高い箱状のボリュームを置き、その上に山陰特有の風雨や積雪を凌ぐ大屋根を架けることで、周辺の自然環境を最大限取り込む生活を実現している。大屋根を支える方杖は、ワンルーム空間を実現するとともに空間をやわらかく仕切り、つながりながらも適度に距離感のある生活が可能となる。大きく伸びた軒と、跳ね出したテラスによる半屋外空間は部屋の延長として使えるだけでなく、道路からの視線を遮りプライバシーを守る役割を果たし、のどかな自然とプライバシーを守りたい室内との中間領域となる。
夏季は大屋根により日射を最小限に抑え、棚田からの涼風を受け止める。西に向かう程屋根を大きく伸ばし、西日への配慮をしている。冬季は日射を最大限取り込みながら、積雪時の雪ずりを道路側溝に落とすことで、雪かきの手間を低減し、裏山で取った薪をストーブに使用することで資源を有効活用できる。
また、大きな荷物は母屋に収納し将来の子ども部屋も母屋に設ける計画とすることで最小限必要な部屋のみを配置したシンプルなプランとしている。
周辺環境や母屋を含めた様々なスペースは実面積以上の広がりを感じられ、自然環境を取り込むことで、季節や時間帯、子どもたちの成長によって心地よい場所が変化する新たな住まいを提案できた。

審査委員講評

中国地方に暮らす人々には至極当たり前の石州瓦。新幹線で東京からやってくると、赤い屋根が延々と連なる様子が目に飛び込んできます。この作品はそんな風景の中に違和感なく溶け込みつつ、ちゃんと自己主張もしています。山陰地方特有の風雨、積雪に耐えるよう設計された大屋根とそれを支える木組みはこの地のランドマークになることでしょう。

リフォーム
住宅部門

佳作

衞藤 翔平

衞藤建築設計室

【作品名】塩屋の住居Re

設　　計	衞藤建築設計室
施　　工	株式会社 田村建設
竣 工 日	2019年11月7日

⦿建物概要

建 設 地	広島県廿日市市	延 床 面 積	90.14㎡
敷 地 面 積	約460.00㎡	構造・規模	木造平屋建

⦿設備面の特記

厨 房 機 器	IHクッキングヒーター
給 湯 機 器	エコキュート
冷暖房機器	エアコン

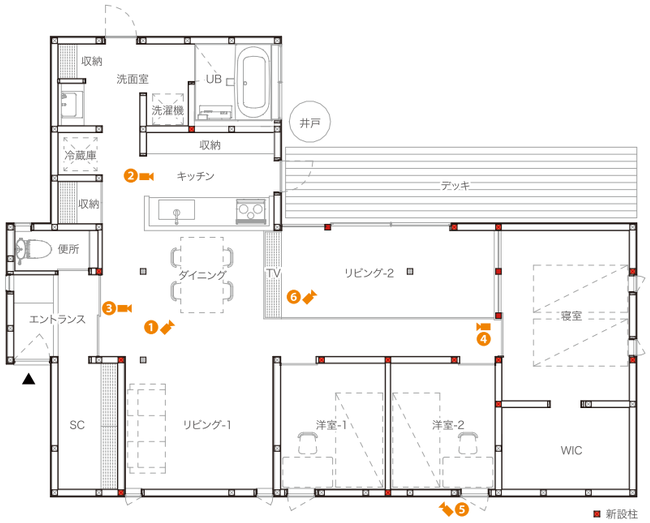
before

after

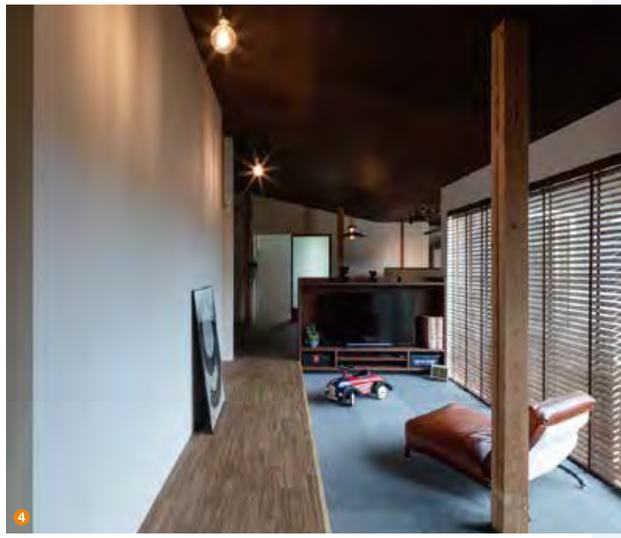
平面図

リフォーム前

リフォーム後



❶リビングから見たダイニング。既存プランを生かした計画だが、コックピットとなったキッチンからは子どもたちの様子が見られる。
❷キッチンからは外の庭を望むこともでき、風通しにも配慮している。



❸エントランスからみる室内全景。断熱性能を高めるために小屋組みは隠したが、結果として快適な室内空間となった。
❹ペットとの快適な共生を目指し、床材にはペットの関節症対策として屋外でも使用可能な防滑シート材とした。写真左は多孔質セラミックスタイルで防臭効果を期待。
❺造作通気口。床下の通気を確保するために多くの通気ルートを確保し、空気の循環を図った。
❻状態のよかった大引などはそのまま使用。リビング-2は基準フローリングより一段低く計画し、外部とのつながりを確保。

設計コンセプト

今回の計画は、ペットの飼育が可能な賃貸アパートで生活をしていた家族が、周囲を気にせず自分たちのライフスタイルで生活できる新たな場を求めていたところ偶然この物件を見つけたことからスタートした。敷地は接道の取れない再建築不可物件であったが、クライアントは築70年の趣ある建屋と豊かな庭に一目惚れし、この地での新たな生活を望んだ。
構造には70年という年月ほどの劣化は見られなかった。屋根瓦は定期的に葺き替えられ、床下は水はけ、通気性も良い。住環境を整える上で耐震・断熱工事はもちろん、既存環境に悪影響を与えない配慮も必要となった。
間取りは既存のL型形状を生かし極力水廻りの位置は変えないこととし、中心にあるキッチンをコックピットとすることで、庭で遊んでいても室内で遊んでいても常に子どもたちの様子がうかがえる計画としている。子どもたちも制限されることなく自由に遊ぶことができる。その他諸室はLDKを囲うように配置し最小限の動線で生活が営まれる計画としている。既存プランを尊重し追従することで建物に大きな負荷をかけず、かつ低予算で計画を実現することができた。
クライアントのこの地へ住みたいという強い意志は様々な選択肢に寛容性を生み、計画の可能性を拡げてくれることへも繋がった。住み始めて、どこか懐かしさもありホッとするという感想をいただいたが、それだけ設計の段階からこの計画へ深く関わり続け、協同してつくり上げることができた故の感想であり結果となったのではないかと思う。

審査委員講評

広い庭にL型に配された住居。L型外形のみを残した全面改装の家。広縁で庭とつながる改修前の住宅とは全く逆の発想で、L型の外周に諸室を配し、中心のLDKの生活ゾーンが庭に開放されています。家族の親密な生活空間をつくりながら、庭に連続した生活が達成されています。
ビフォーとアフターの逆転の空間構成が成功しています。

審査委員
特別賞
（リフォーム）

鳥取県

磯江 知弥

合同会社グラムデザイン一級建築士事務所

【作品名】東郷のビル

設　　計	合同会社グラムデザイン一級建築士事務所
施　　工	株式会社 辻工務店
竣 工 日	2019年10月1日

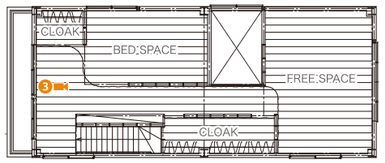
⊙建物概要

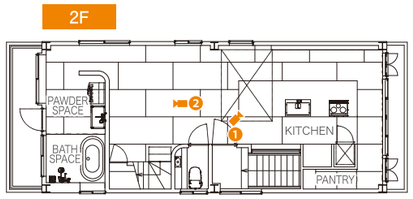
建 設 地	鳥取県東伯郡	延 床 面 積	166.83㎡
敷 地 面 積	80.48㎡	構造・規模	鉄骨造3階建

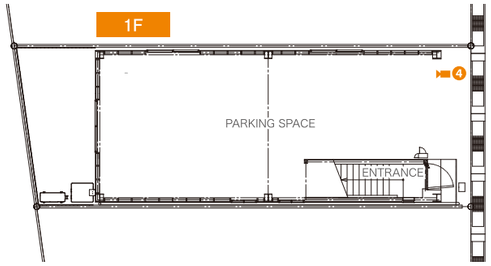
⊙設備面の特記

厨 房 機 器	IHクッキングヒーター
給 湯 機 器	エコキュート
冷暖房機器	エアコン

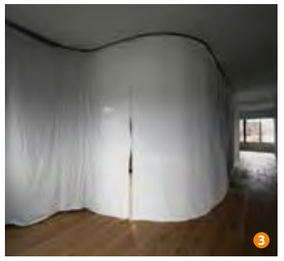
平面図

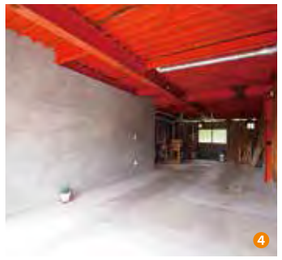






❶大きなテーブルは作業、料理、食事等、様々な活動を広げる事ができる大きさとし、その受け皿として十分な強度を保てるよう、天板はモールテックス塗り、脚部はスチールで造り付けた。
❷内部は間仕切り壁を最小限にし、ほぼワンルームに仕上げている。





❸3階のカーテン間仕切り。カーテンレールを農業用パイプを加工しRをつくり、素材だけでなく、形状による柔らかさも意識した。
❹駐車場。店舗部分をほぼ解体した状態でとどめている。ものづくりのスペースとしても活用しているが、これからの生活で必要に応じて改変することができる余白を有した場所とした。

設計コンセプト

鳥取県の中部、湯梨浜町の中心に位置する東郷池を目の前にした鉄骨造3階建てを改装した自邸である。
1階はもともと店舗であったが、ほぼ解体のみで工事を済ませ、駐車と作業スペースとしている。
2階から始まる生活スペースは床をフレキシブルボードで仕上げ、そこにキッチンとテーブルの機能を兼ねた大きさの家具を設えた。
2階南側には間仕切り壁を自立させ、バススペースとリビングスペースをゆるく分け、2･3階は新たにつくった吹き抜けと階段を介して縦方向に繋がり、室内全体を大きなワンルームとなる構成とした。
2階から3階への階段はMDFで造り、寝室とクロークスペースからなる3階は床を杉板貼りとした。1階から3階へ上がるにつれ、常に触れている部分である床素材に変化をもたせ、柔らかさと温かみのある木質素材へのグラデーションとなるよう素材を選定している。ワンルームの中に活動的なスペースから休むスペースへ移動するなかで、生活リズムを身体的にもにも感じられるサーキュレーションをつくりだした。
また、ワンルームの中で日常の行動に合わせた室容積となるよう、比較的柔軟性のある間仕切りをつくり、室内環境を繋げながら部分部分の設え等で部屋用途が分けられるようにしている。
室内の天井と内壁はどこでもビスにより家具などが取り付けられるよう、合板貼り。その上に山陰の曇り空との親和性をもたせるため、青みがかった白色に塗装した。現在も少しずつこの住まいに手を加えており、生活に必要な設えや、経年で改修が必要な部分等、自ら施工できる部分はできる限り自分の手をかけ、かたちにおこすための思考を続けている。
ここで生活する私達家族が、大きな空間の中で繋がりながら、それぞれの活動を広げられ、また変化を続けることができる住まいとなったように感じている。

審査委員講評

6本柱鉄骨造の改装。間仕切りと建具で間取りをつくるのではなく、ワンルームの矩形の箱にRの自立壁やRのカーテン仕切り、MDFの階段等、生活のための最小限の措置で空間を構成しています。曇り空のような白っぽい空間の中に、家具のような記号のようなものが点在したシュールな空間が生まれています。これからの展開が楽しみな家です。

審査委員
特別賞
（新築）

島根県

原 浩二・土床 拓也

原浩二建築設計事務所・土床建築事務所

【作品名】キノコノイエ

設　　計	原浩二建築設計事務所・土床建築事務所
施　　工	八光建設 株式会社
竣 工 日	2020年7月22日

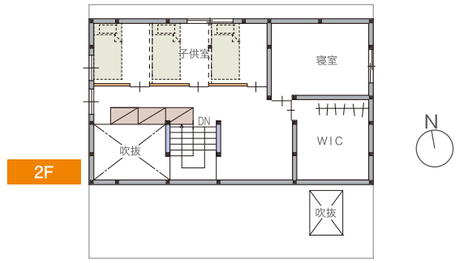
⊙建物概要

建 設 地	島根県松江市	延 床 面 積	109.52㎡
敷 地 面 積	232.79㎡	構造・規模	木造2階建

⊙設備面の特記

厨 房 機 器	IHクッキングヒーター
給 湯 機 器	エコキュート
冷暖房機器	エアコン

平面図



❶周囲を民家が覆う敷地で、周囲からの視線を遮り、また夏季の暑さを防ぐ大きな軒下空間。玄関アプローチを兼ね、生活の中心に軒下空間が活用される。
❷土間スペースは、屋外と室内をつなぎ、リビングと庭の活用性を生み出す役割を果たす。
❸2.7mのはね出した庇によってできた、子どもたちの遊び場的スペース。アプローチも兼ねている。

❹国の補助金を取得するため樹脂サッシ、断熱材等の調整・計算を行い環境負荷を低減し断熱等性能等級4を取得。屋根と外壁上部をアスファルトシングル、外壁下部を塗装サイディング張りとしている。庭へ差し込む日差しも調整している。

設計コンセプト

島根県松江市の街中にあり、4面に民家が立ち並ぶ旗竿敷地に建つ2階建ての住宅である。
四方を民家に覆われた敷地でいかに住環境を整え、生活の豊かさと楽しみを得られるかを考えた。
一間半(2.7m)の大きな庇を設け、そこに家族の居場所と、子供たちの遊びの場を設けた。大きな庇によって覆われた空間に家族の団らんとなるいくつかの仕掛けを用意した。外キッチン、屋外デッキ、ブランコを設け、植栽を植え、軒下空間でのにぎやかな生活が、家族の新しい生活スタイルをつくりだしている。また、大庇は隣地からの視線によるプライバシーを確保し、夏季の暑さを防ぐ役割を果たす。玄関のアプローチ空間をそのまま庭として考え、山陰の雨の多い地域でも気にすることなく活用できる。
大庇によってできた軒下空間、室内と軒下をつなぐ土間空間、リビングダイニングなどの主生活ゾーンと、水廻りなどのサブゾーンの四層から構成されるプランを考え、2階は屋根面を利用した斜め壁をつくり施工面積を抑えている。家事の最中に子供たちの様子が見えるように、キッチンを中心に置き、土間をLDKに沿って配置し、各部屋をオープンに繋げている。また室内に設けた土間スペースが屋外と室内をつなぎ、リビングと庭の活用性を広げる。
リビング、ダイニングは階段室を介して配置し、用途によって居場所のたまりをつくり、そのたまりを回遊性によってつなぎ、生活のアクティビティを生む住宅となっている。

審査委員講評

軒下、土間、LDK、水廻りのゾーンをストライプ状に配したシンプルな平面計画の住宅。軒下にキッチン、土間に階段踊り場、LDKにアイランドキッチン、水廻りゾーンに学習スペースをとり、シンプルでありながら、住まい全体が変化に富んだ空間となっています。コンパクトに包まれて、楽しさに満ちた家族の生活が想像されます。

審査委員
特別賞
（新築）

岡山県

塚本 雅久

塚本雅久建築設計事務所

【作品名】K HOUSE

設　　計	塚本雅久建築設計事務所
施　　工	株式会社 松建グループ
竣 工 日	2019年12月5日

⦿建物概要

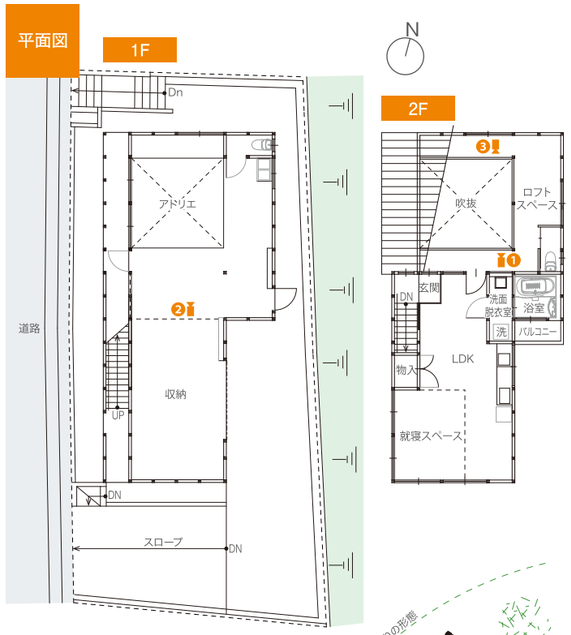
建 設 地	岡山県笠岡市	延 床 面 積	129.58㎡
敷 地 面 積	200.61㎡	構造・規模	木造2階建

⦿設備面の特記

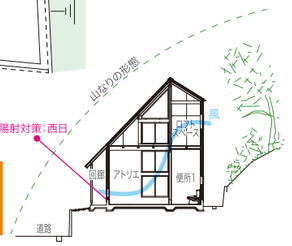
厨 房 機 器	IHクッキングヒーター
給 湯 機 器	エコキュート

❶アトリエとつながるロフトスペース。吹き抜けがあり、上部から大きな作品を確認できる。
❷南からアトリエを見る。地窓は、北側の安定的な光だけが必要なため通常は閉じている。通風のために、合板の扉を上げることもできる。
❸北からロフトスペースを見る。アトリエと繋がり、LDK、洗面脱衣室とも視覚的に繋がる。

平面図



断面図



設計コンセプト

敷地は約50年前に切り開いた宅地。以前、周辺は山なりの形状で、その片鱗をうかがわせる形状が残っており、近隣との環境をつくる上で以前の形状を尊重し山なりになる形態を計画した。西道路から東側の樹木のレベルを検討し、形態を決定している。
西側に7m弱の前面道路、東側には山形状に見えるが以前は果樹園だったなだらかな丘が広がる。北から南に道路のレベルは上がっていくので、北側は軒を低く、南側は2階建てとした。
施主は、芸術を生業とする夫婦。創作と生活の境界はなく新たな生活の場はイコール新たな創作の場である。よって全ての空間が関係性を持つワンボックス的な計画とした。西道路側から回廊を介し、地窓から山へ風が通るようにし、良好な風が通る空間となった。1階はアトリエと付随する収納、2階のロフトスペースはアトリエと繋がる吹抜けがあり上部から大きな作品を確認する事ができる。ロフトスペースとLDKはガラスで仕切り、2階全体で南北の広がりを持たせており、施主の活動が一体となり空間構成となる住宅となっている。創作活動と生活が同一のため、日々の継続する室内環境は、西日の強い光を避け、北側の安定した太陽光を中心とした計画としており、回廊は夏の1階西側の壁に直射日光を防ぐものとし、道路とのレベル差を緩衝するために設けた。通風の計画とあいまって、安定した室内環境となっている。

審査委員講評

敷地周辺の傾斜や方位などの環境条件から全体のボリュームを決定し、クライアントの生活スタイルに合わせた住宅、秀作です。前面道路側の列柱が美しく、西陽を避ける機能を併せ持たせた最適な選択です。2層分の吹き抜けのあるアトリエは、北側の高い位置からのやわらかい光に満たされた、素晴らしい創作活動の場になっています。

審査委員
特別賞
（新築）

広島県

稲上 幸生

稲上幸生建築設計事務所

【作品名】1R

設　　計	稲上幸生建築設計事務所
施　　工	工匠くつろぎ 株式会社
竣 工 日	2019年3月31日

⦿建物概要

建 設 地	広島県三原市	延 床 面 積	99.36㎡
敷 地 面 積	240.30㎡	構造・規模	木造2階建

⦿設備面の特記

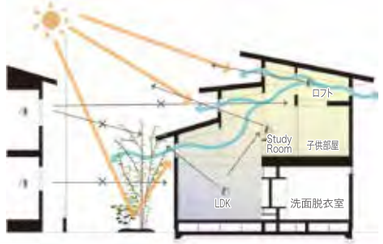
厨 房 機 器	IHクッキングヒーター
給 湯 機 器	エコキュート
冷暖房機器	エアコン

❶リビングからダイニングキッチンを見る。施主の要望である薄暗く静寂な空間を作り上げた。

❷子ども部屋は3つの空間に分割できるよう、出入口、収納棚、ロフトへの吹抜を設け、ロフト部分を各寝室にできるよう設計。
❸吹抜に面して2階に設けたスタディルーム。子ども部屋と夫婦の寝室前に配置し、自由に使うことができる。

平面図

断面図



設計コンセプト

広島県三原市の住宅街。計画地は南北を山林に挟まれた谷に位置し、北西側の山からは土砂災害特別警戒区域のレッドラインが敷地の半分を覆っている。だがこの地に愛着を抱く施主の思いを鑑み敷地に潜む豊かさを最大限に活用することを課題とした。

施主からは、LDKは薄暗くし、外部に対して閉鎖的だが内部に対しては開放的な空間、寝室・子ども部屋といった居室には扉は必要なく家族の声がどこにいても聞こえてくる空間を要望された。
要望に対して、三枚の屋根と断面的に大きな一つの空間で構成された建築を設計した。

各屋根の下にはリビング、study room、各居室、ロフトを設け、各用途に対して隣地からの視線、光や風、プライバシーを考慮しそれぞれ異なる勾配とした。
各屋根により各空間には異なる開放感が与えられ、リビングからロフトへかけての一つの空間が薄暗く静寂な空間から光や風を感じる開放的な空間へと立体的に変化する。

断面的な一つの空間に対して各屋根を設けることで多様な関係性と距離感を立体的に与えることができる1R空間とした。

審査委員講評

大屋根が印象的な外観です。それぞれ異なる勾配の3枚の屋根は単に意匠的なものとしてだけではなく、通風と採光といった機能を考えてデザインされたものということが見て取れます。内部は巨大なワンルーム。忍者屋敷のような複雑な木組みを眺めながら暮らす3人のお子さんは毎日楽しいだろうなあ。内、外とも子育てにぴったりの「お家」です。

審査委員
特別賞
（新築）

山口県

田原 征幸

積水ハウス株式会社 山口支店

【作品名】3×3の家 ～家族を包み込む豊かな空間～

設　計	積水ハウス株式会社 山口支店
施　工	積水ハウス株式会社 山口支店
竣工日	2020年9月10日

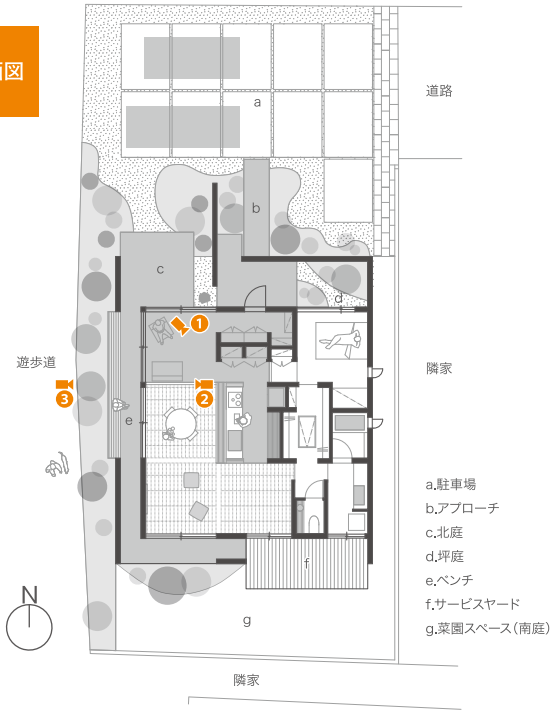
⦿建物概要

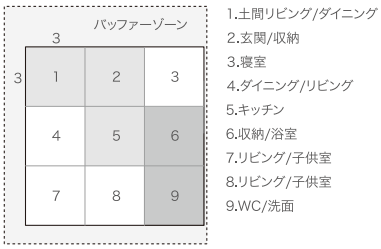
建設地	山口県宇部市	延床面積	82.08㎡
敷地面積	325.92㎡	構造・規模	軽量鉄骨造平屋建

⦿設備面の特記

厨房機器	ガスコンロ	
給湯機器	エネファーム	
冷暖房機器	エアコン	床暖房（温水式）

平面図





❶太陽光とエネファームのダブル発電。床暖房・高断熱サッシを採用することで、大きな開口部を計画しても快適な住空間を実現した。
❷木フレームベンチ部に設けた屋外カーテンを閉めると、外部からの視線を遮りつつも、葉影が映り込み、幻想的な室内空間を楽しむことができる。

❸「夫婦で夜にお酒を飲むことが毎日の楽しみ」と非常に喜んでいただいたベンチ。

設計コンセプト

建築地は、山口県宇部市内にある閑静な当社分譲地の一画です。北、南、東は住宅に囲まれており、西は造成前からあった遊歩道に隣接した敷地で、30代前半のご夫婦は、平屋をご希望されました。奥様からのご要望であった「室内からも緑を楽しめる暮らし」をキーワードにどういう暮らし方ができるかを考えた住宅です。

【ヒューマンスケール】
小柄なご夫婦のため、各空間をコンパクトな3m×3mの「グリッド」を、3×3の9マスで平面を構成し、仕切りを極力無くすことで居場所や用途を限定せず、可変性のある空間を楽しみながら生活する。

【バッファーゾーン】
「グリッド」を内包し、開口と壁のバランスを調整しながら、目隠しの板塀やベンチになる木フレーム（W=6000）、屋外カーテン、坪庭を計画し、外部と程良い距離感が生まれ、安心感を与える。

【周辺環境への配慮】
遊歩道が緑道となり、周囲の歩行者の方々の気持ちも豊かになるように緑を計画。室内からも木フレーム越しに楽しめると同時に、南北の庭も緑で囲む事により、外部からの視線にも配慮する。
室内空間は、重心を低く抑え落ち着きのある空間となるように天井高さは2252㎜とし開口や壁を整理しました。西日の強い時間帯等は、屋外のレースカーテンを閉める事で葉影だけを室内に写し、幻想的な空間となる計画としました。外部と内部を塗り壁仕上げ、モルタル床以外の床や家具はオーク（グリッド柄）で統一する等、素材に配慮し、照明はグレアレスダウンライトと屋外照明をバランス良く計画し、夜の庭も楽しめる居心地の良い住宅を目指しました。

審査委員講評

タイトル通り3mグリッドの9マスとそれらを取り巻く緩衝帯空間によって、心地よいプライバシーと抜けが生み出されており敷地に対する真摯な計画に好感を持ちました。柱によって強いグリッド領域を作るのではなく部屋の区画や床の素材によって居室間に緩やかな関係性を作り出している点がそう感じさせているように思いました。外部までレイヤー状に連なる居室とカーテンによる領域の変化など様々な生活シーンの広がりを感じました。

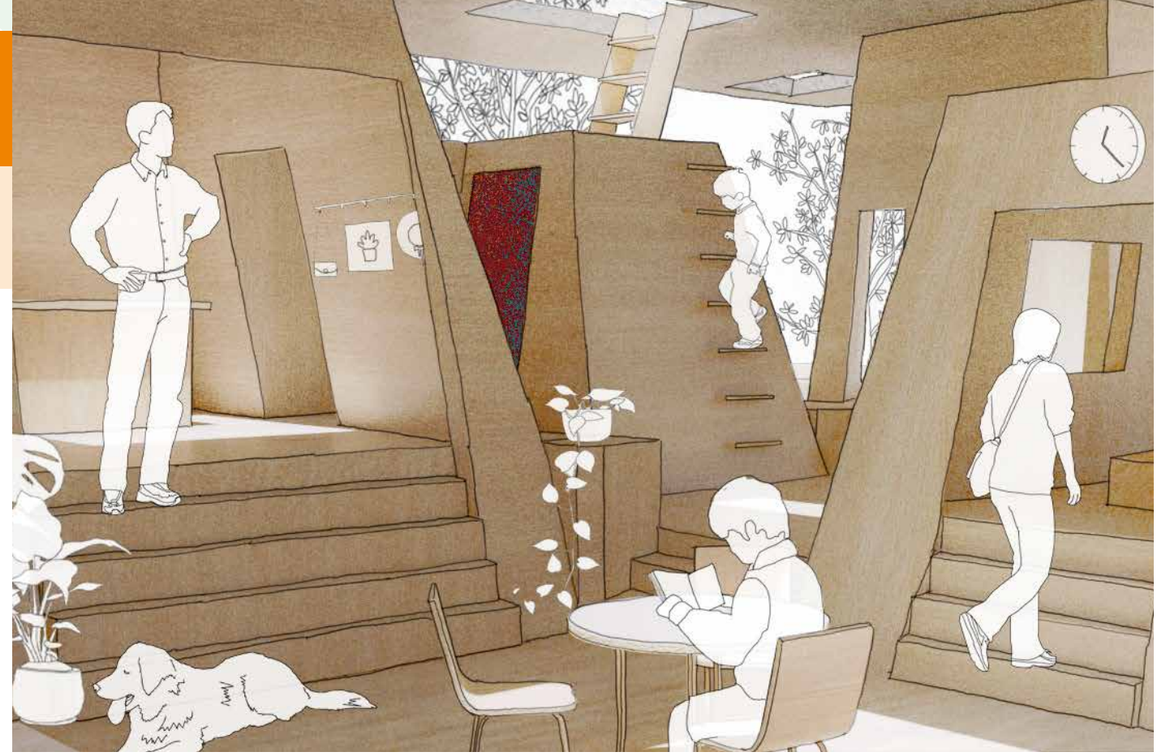
学生部門

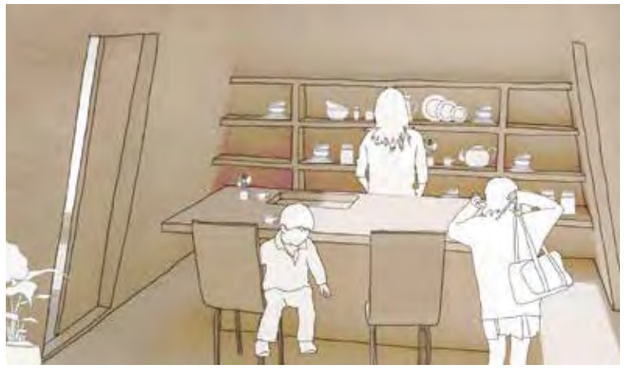
最優秀賞

大久保 尚人

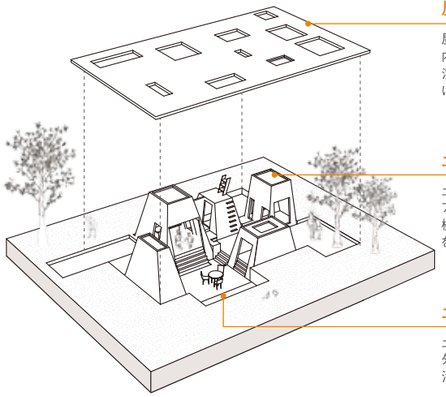
芝浦工業大学大学院

【作品名】大地が息づく住まい





空間構成「土地と一体となった建築」



屋根上空間

屋根上は広々とした広場空間。内部に木漏れ日のような空間を演出するためのトップライトを設け、上下の繋がりを演出。

土壁のコア

土地と連続するように設けたコアにはプライバシーが求められる機能を入れている。加えて屋根を支える主構造の役割も担う。

土のくぼみ

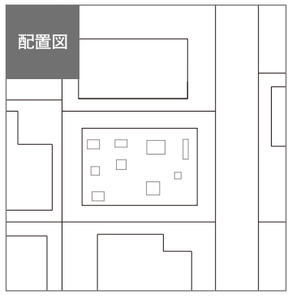
土のくぼみ空間は、暮らしの中で外部との接続を助け、加えて生活を拡張する役割を担う。

SITE 山梨県富士吉田市

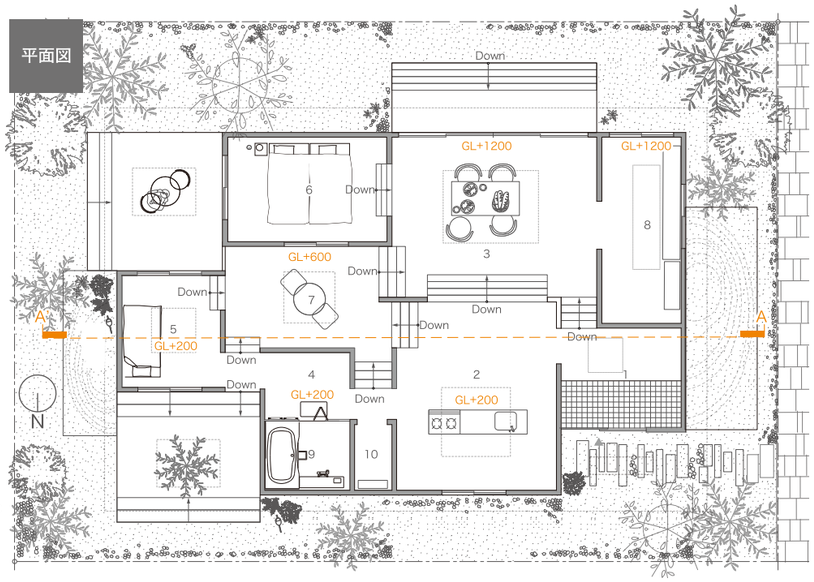
住宅地開発がすすむ自然豊かな敷地

都心部まで一時間弱に位置している自然豊かな住宅地。働き方の変化とともに郊外に暮らす人が増えていくことが予測される中で需要が高まっている地域。

配置図

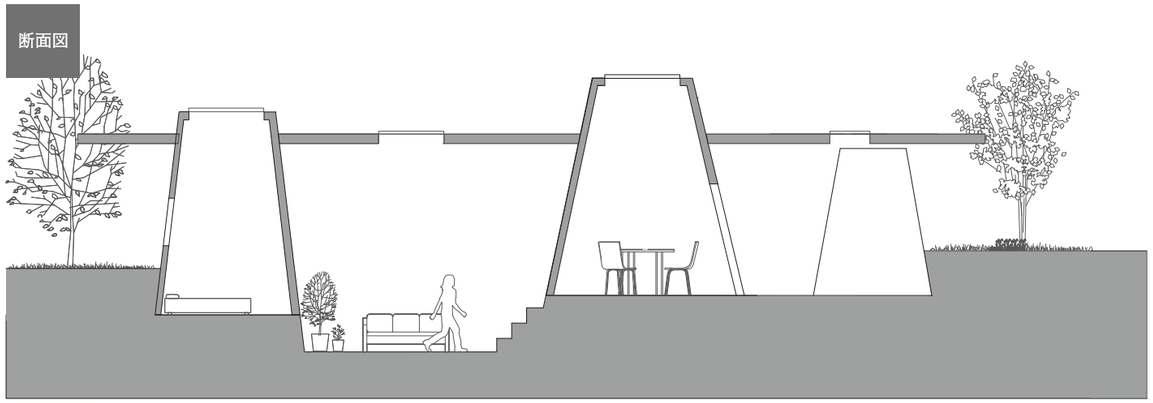


平面図



1.玄関　2.キッチン　3.リビング　4.水回り　5.子供部屋　6.主寝室　7.フリースペース　8.仕事部屋　9.浴室　10.WC

断面図



SECTION A-A'

設計プロセス「土地を建築する」

01 敷地がある

02 敷地に起伏をつける

03 そっと屋根をかけて空間を切り取り、内部空間を設える

設計コンセプト

コロナの影響により家の中にいる時間が多くなりつつある昨今に、現状の住宅の閉じ切った形態に窮屈さと息苦しさを感じる人が増えてきているのではないでしょうか。
そこで、このような状況だからこそもう一度「外との繋がり」「自然との暮らし」を築くための住宅を考える必要があると感じました。
現状の住宅は外部と内部が明確に分かれており、現状の建築の建てられ方に問題があると考えました。また、現状の住宅計画では、建築と敷地を切り離し、敷地に建築を置いた後、その余りとして外構を扱うことが多くあります。これが、できあがった後も敷地と建築を切り離してしまうことに繋がっていると思いました。
本提案では、現状のように敷地に対して建築を一度切り離すのではなく、建築と敷地を同時に扱い「土地を建築する」ことで自然との豊かな暮らしを築くための住宅を提案します。

設計手法として、「敷地に掘りこまれた場所」と「小山のように盛り上げられた場所」の単純な操作によって生まれた場所にそっと屋根をかけてあげるというある種、初源的な建築の創られ方を現代的に再解釈し住宅を作り上げています。
結果としてできあがった空間では、大地の恵みである土の「調湿効果」「蓄熱効果」など生活を快適にする恩恵を受けて暮らすことができます。
さらに、閉じすぎず開きすぎない空間の中では、大地の存在を確かに感じながら、空間の中を移動しながら自分が心地よいと感じる場所を探しながら暮らすことができます。
この提案は、進歩する技術の中で、素材や土地がもつ豊かさに気づくことができる建築の本質に迫るものではないでしょうか。

審査委員講評

まさに地産地消の家。古来、日本の住宅はその地で産する木、紙、土を基本の建築素材として使ってきました。その伝統を21世紀の今に、愚直に再現しています。どこかで見たような気もするし、全くあたらしいデザインのような気もする不思議な建物。身の回りで手に入る材料を使いながら、自分で修復しつつ住み継いでいく楽しさもありそうです。

夏は涼しく、冬は暖かい土壁の温熱環境

蓄熱・調湿・遮音

～心地よい空間を実現する土壁の万能さ～

生活の温熱環境を整える調湿効果と蓄熱効果に加えて、遮音効果、脱臭効果、防火効果など多岐にわたる土壁の環境効果。部屋ごとに土壁の塗り材を適切に変えることで、より快適な生活を設えることができる。

用途に適した仕上げ材の使い分けと活用

玄関
01 火山白土
長い月日をかけて自然が作り出す天然素材。上質な質感が得られる。

台所
02 珪藻土
湿度の高い水分を吸い、乾燥時には水分を出す調湿機能がある。

トイレ
03 脱臭土
臭気成分が土壌表面に吸着して、土壌中に移行し微生物により分解される。

寝室
04 多孔質土
調湿効果、多孔質な表面が遮音効果をもたらす。

寝室
05 火山灰土壌
調湿効果とともに強度も優れており、住空間に適した素材。

客間
06 聚楽土
極細やかな土特有の高級感のある質感が空間に落ち着きと癒しをもたらす。

学生部門

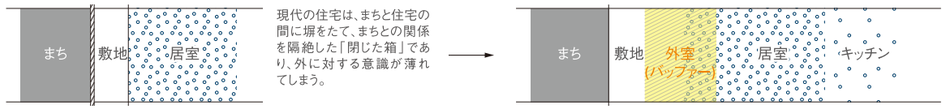
優秀賞

堀田 翔平・牛島 美夏

信州大学　熊本大学

【作品名】一家段欒 -家族の気配とまちの余韻を纏う家-

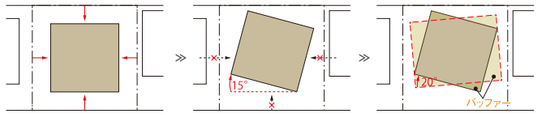
コンセプトダイアグラム



現代の住宅は、まちと住宅の間に塀をたて、まちとの関係を隔絶した「閉じた箱」であり、外に対する意識が薄れてしまう。

まちと居室の間にsemi-privateな「バッファー空間（=外室）」を挿入し、まちからの余韻を居室に引き込む。この余韻（= 音・匂い・天気・光・風）が日常に非日常を与え、団らんのきっかけをつくる。

ダイアグラム❶　角度を振ってまちの余韻を引き込む



敷地境界から均等にセットバックし、周辺環境を引き込む余地を外周に設ける。

前面道路や隣家に対して15度振ることで直接的な視線を避け、まちと住宅との関係を曖昧にする。

2階部分を1階に対して20度（敷地に対して5度）振ることで、内外さまざまなバッファーをつくる。

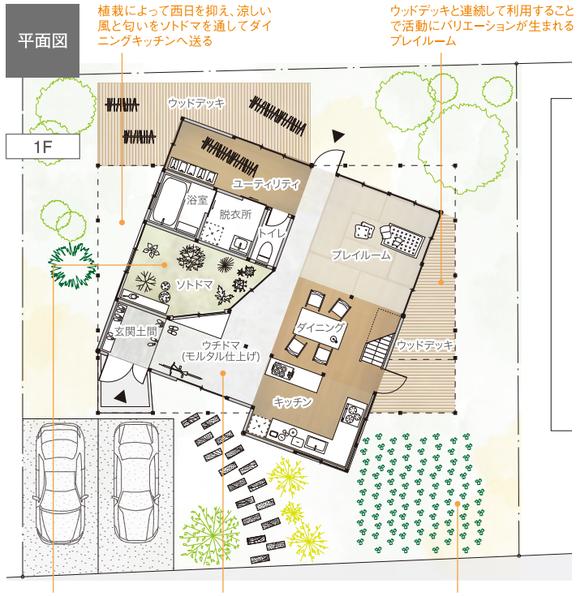
ダイアグラム❷　家族の気配を感じられる中心性と分節

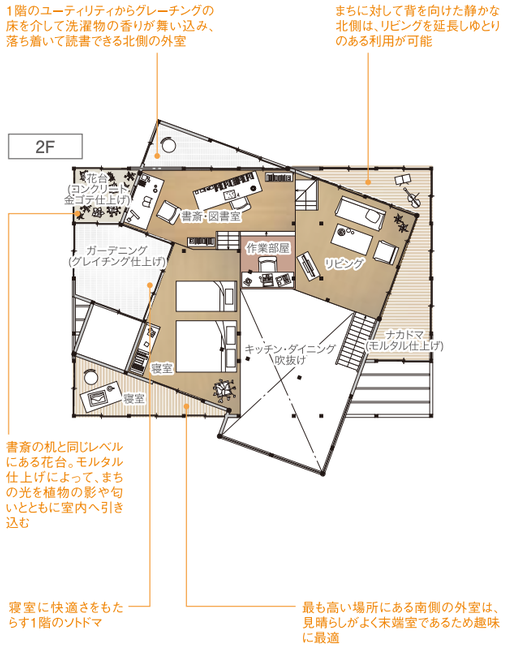
1階にキッチンやプレイルームなどのsemi-public機能を配置し、2階にプライバシーの高い機能を配置。

キッチンを中心に、2階部分を段々のらせんを描くように配置させ、キッチンの中心性を高める。

1階をワンルーム、2階は床を分節して隣の室同士を接続。家族の気配を感じることができる。

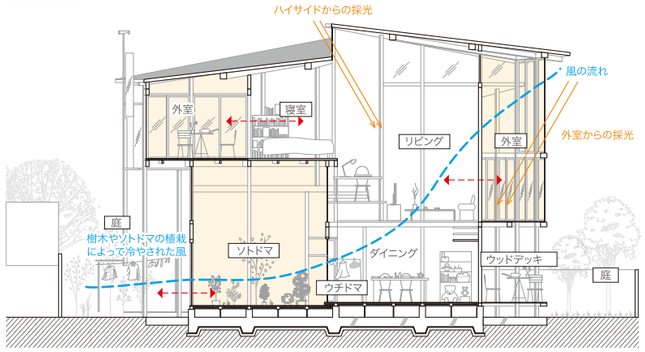
平面図





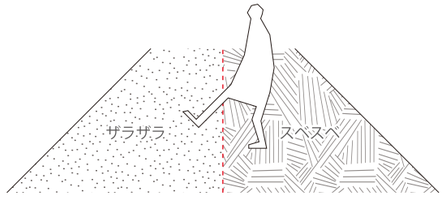
断面図

ダイニングキッチンを囲むように居室、外室をすべての方位に設けまちの様子を住宅内に映し込み、家族の団らんを生み出す。室内環境はハイサイドライトや温度差を利用した自然換気などを利用。細かく分節された屋根は周囲の環境との調和を図る。



マテリアルによる室の分節と仕上げテクスチャ

機能の異なるテクスチャの床仕上げ材を張り、住宅内部をマテリアルの変化によって分節。1階は「モルタル金ゴテ押さえ」仕上げのウチドマが東西をやわらかく分節し、2階は各外室にさまざまなマテリアルを用いることで、光や匂い、音といった外部環境を内部に引き込む。異なるマテリアルを跨いで家具を配置し、住まい手に自由な使い方を与える。



1階のウチドマとダイニングの自由な使い方

2階のリビングと外室の自由な使い方

設計コンセプト

かつて、建具を開けるとまちを行き交う人々の声が家中に響き渡ったのに対し、現代の住宅は、気密性やプライバシーを重視しすぎた結果、まちから隔絶されています。そのような排他的な“余韻”が入り込む余地のない住環境では、日常にまちから伝わる微々たる変化を感じられません。

『あ! いま金木犀の香りがしたね』
『今日、隣まちのお祭りの太鼓の音色が聞こえたよ!』

こんな些細な変化を体験できる家であれば、家族の団欒が自然と生まれるのではないでしょうか。この提案は、住宅とまちの間にバッファーとなる外室を介入させることで両者を緩やかに繋ぎ、『日常に微々たる非日常』をまちから“余韻”として引き込む住宅の提案です。引き込んだ“余韻”はバッファーを介して居室に伝わります。さらにスラブを細かく分節して壁をなくし、段々の螺旋状に配置した居室から“まちの余韻”と“家族の気配”が家の中心に伝わり、趣味や家事といった個性楽しみながらも家族の顔がうかがえます。

ささやかな空間の仕掛けが『日常に微々たる非日常』を与え、『一家段欒』が日常的に起こり、家族の新たな住まいを築いていきます。

審査委員講評

敷地に対して平行ではなく少し角度を振ることで周辺との隙間に生まれる余韻を引き込もうとする案。1層と2層とでさらに微妙に角度を振ることで生まれる内部空間のズレに対して素材による空間の変化に意識できている点が実に興味深いと思いました。また平面パースによって螺旋的に変化していく内部空間を立体的に見せる表現が印象的でした。

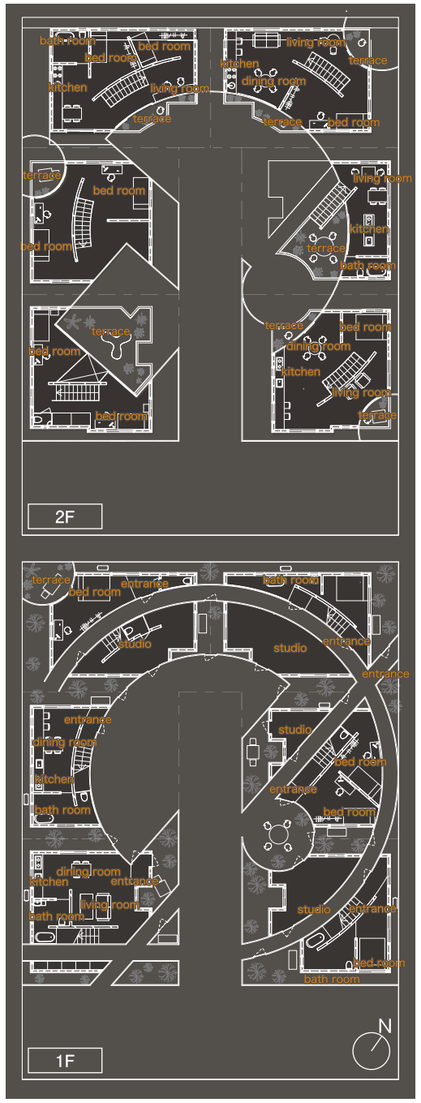
学生部門

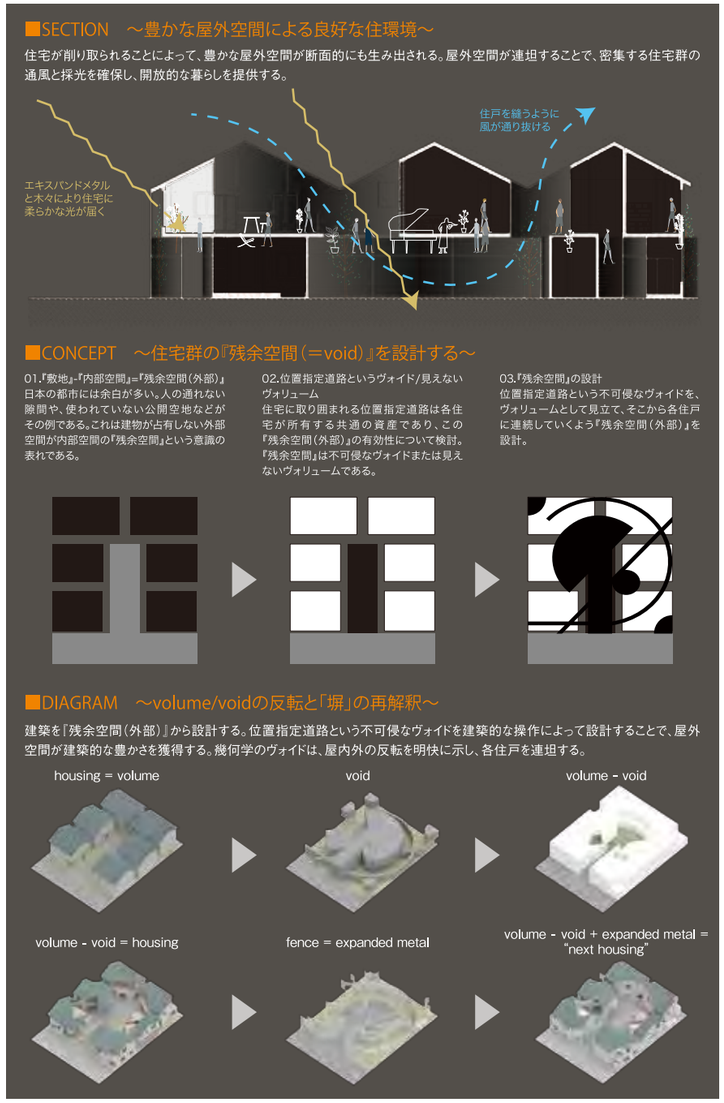
住作

石田 弘樹・一柳 亮太郎・岩崎 正人

日本大学

【作品名】volume//void（ヴォリューム／ヴォイド）～位置指定道路を介して繋がる住宅群～





設計コンセプト

日本全国各地に無数に点在する位置指定道路（42条1項5号道路）に着目した住宅群の提案。コロナウイルスによって自宅で過ごす時間が増えたことにより、多くの人が屋外空間の重要性に気づき始めた。今後、住宅設計においてどのように開放的で豊かな屋外空間を取り込むかが重要になるだろう。また、自宅で過ごす時間が増えたからこそ、周辺住民とのコミュニケーションも重要になる。

本提案は、住宅と住宅、または家族と家族が築く「連帯感」をポストコロナ時代を見据え共通の資産である『道』を介して拡張していく、新たなコミュニティの在り方と豊かな屋外空間を持った住宅群の提案である。

位置指定道路を含めた住宅群の隙間を『残余空間（void）』と捉え、建築的な操作を行うことで豊かな屋外空間を獲得する。道路などの外部空間の形態と、住宅の内部空間の形態の双方が、建築的な豊かさを持ちうるように、内部／外部、ヴォリューム／ヴォイド、図／地が拮抗し反転し合うことで、住宅群に連坦する屋外空間をもたらす。

さらに、近隣住民同士の関係や内部／外部の繋がりを遮っていると考えられる「塀」を再解釈する。各住戸を連坦するように塀を立ち上げることで、住宅群に一体感を与える。また、再解釈された塀にはエキスパンドメタルを用いることで通風と採光を確保し、良好な住環境を担保する。

審査委員講評

少子高齢化の進む現代社会において、非常に説得力のある計画です。日本のあらゆるところに存在する位置指定道路と住宅の区画の本来のあり方を熟慮し、コミュニティの場へと改変させています。小さな子どもたちとお年寄りを含めた真に「向こう三軒両隣」的な楽しさが伝わって来ます。ゆるくカーブさせた壁面や屋根の形状が、それらの事を助長しています。

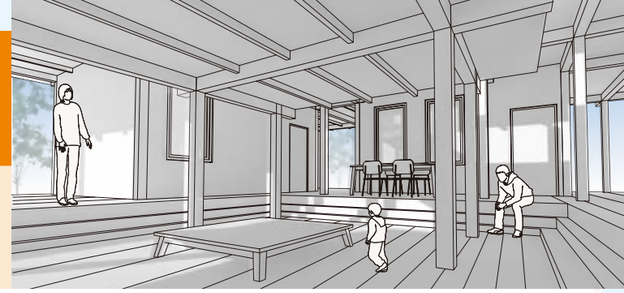
学生部門

審査委員特別賞

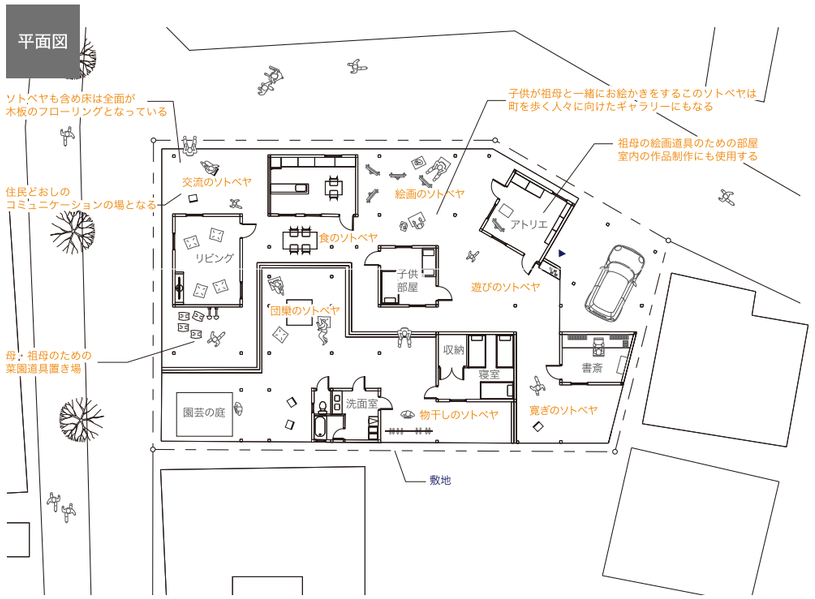
伊東 俊哉

筑波大学大学院

【作品名】ソトベヤ -はだしのまま外に出る-

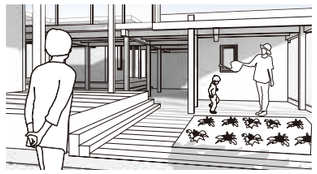


団欒のソトベヤ

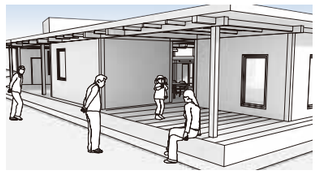


遊びのソトベヤ:2つの違う高さの屋根の隙間から光が差し込む。

菜園の庭:住人との会話のきっかけが生まれる。



交流のソトベヤ:住宅街の角地が住民同士の交流の場となる。



1.背景

・家族との適度な距離感　・外出機会の減少

住み手を自分の実家の家族と想定。仕事や学校のオンライン化で生まれた一日中家で家族といる生活は心身の健康状態によくないと感じる。よって外に出て行きやすい住宅がこれからの生活に必要であると考える。

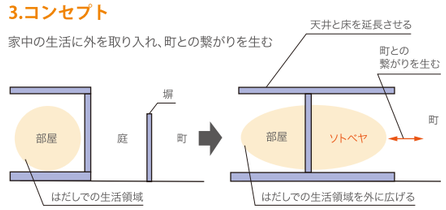
2.敷地

住人の高齢化によって商店街にあった個人店がチェーン店に変わっていく。希薄になってしまった小岩における商店街周辺の地域コミュニティ再興のきっかけをつくる。

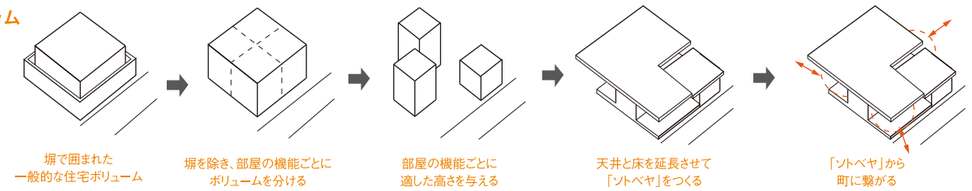
東京都 江戸川区 小岩

3.コンセプト

家中の生活に外を取り入れ、町との繋がりを生む



4.ダイアグラム



設計コンセプト

「家族で築く新たな住まい」というテーマから、私は自分自身の家族の暮らしの変化から着想を得て設計をした。仕事や学校の授業がオンライン化し、外に出る必要が少なくなり、家族と四六時中同じ家の中にいる状況がある。一日中家の中で過ごす生活はストレスが溜まり、心身の健康状態にもよくない。そこで私は生活する中で外に出て行きやすい住宅がこれからの家族の暮らしに必要であると感じた。

敷地は東京都江戸川区小岩の商店街近くの住宅地である。かつてこの町には個人の店舗が多く、住人同士のコミュニティが存在していた。しかし、店を経営する住人の高齢化によってそのような店は見られなくなり、地域コミュニティが希薄化した。私はこのコミュニティ再興のきっかけが生まれる住宅をつくりたいと考える。

上記の2点の課題を踏まえ、コンセプトを「家中の生活に外を取り入れ、町との繋がりを生む」とした。部屋の床と天井を延長させ、壁は存在しないが、はだしで内と外を行き来できる「ソトベヤ」をつくる。「ソトベヤ」で行われる家族の振る舞いは外から見え、町を歩く住人との会話が生まれる。それは地域コミュニティづくりのきっかけとなるだろう。

以上のような生活をする中で外に出られ、また家族の振る舞いやそれに伴って「ソトベヤ」に置く家具が住宅のファサードの一部となり、町と繋がるきっかけを生む「家族で築く新たな住まい」を私は提案する。

審査委員講評

敷地を仕切る塀なるものを取り払い必要な諸室に対して条件を与え、各々の屋根や床を延長させることで周辺に対しての居場所を生み出す案。シンプルな手法でプライバシーとパブリックの関係性を作り出し街に対して開くアイデアがいいと思いました。

一方、さらにこのアイデアで周辺住宅をも構成していく新たなコミュニティも創造してほしいと感じる案でした。

学生部門

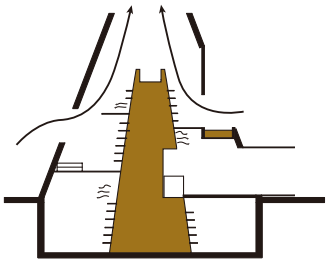
審査委員特別賞

石 珂鳴
京都工芸繊維大学

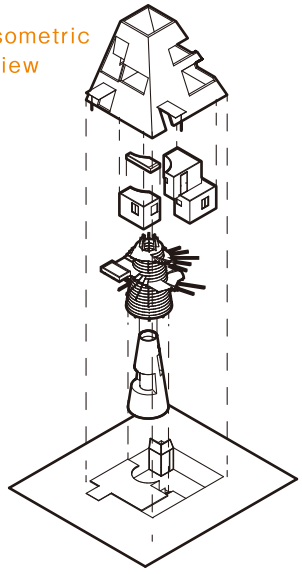
【作品名】土柱の家 -自然を介して心を繋ぐ-

土柱の保温効果、通風

土は通気・調湿・調温の性質を持つ素材である。土に無数の気泡が入っており、外の空気と中の空気を自然に入れ替え、空気を循環させる換気効果を持つ。蒸し暑さやじめじめした空気を緩和し、夏は涼しく冬は暖かい快適な室内空間が期待できる。屋根の形とところどころの開口部、吹抜によって下から上へ風の通路ができて換気効果があがる。

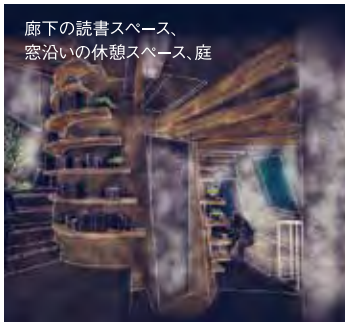


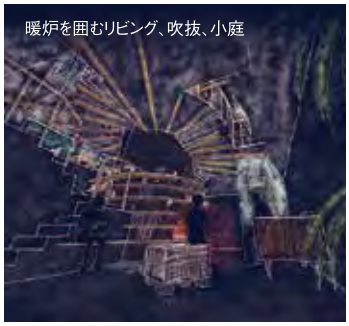
Isometric View



開いたスレート屋根、
道とつながる庭、ベランダ

天窓を開けると外気とつながった風呂場、
棚と一体になる机


廊下の読書スペース、
窓沿いの休憩スペース、庭


暖炉を囲むリビング、吹抜、小庭

設計コンセプト

コロナウイルスが蔓延しつつある今、ディスプレイ越しの/フェイスシールド越しの/マスク越しのそんな対面が続く毎日、私達の五感を開放できる場所は家しかないのではないかと感じた。
もう一回振り返って日本の竪穴住居を見ると、現代の生活と遠くなりつつある土の存在に気づく。土のザラザラとした質感、心が安らぐ匂いとぬくもりはなぜか子どもの頃の記憶を呼び起こしてくれた。
そこで土を用いて家族みんなをつなげる家を設計したいと思い、津島遺跡が発見された岡山運動公園近くの住宅街に敷地を選んだ。敷地内の土を一階分掘って土の柱を作る。木のフレームを土の柱に挿入することによって構造を補強しながら、机や本棚ができて、家族それぞれの趣味のものの展示スペースにもなる。土柱と外壁の間に高さが違う寝室を配置する。幅広い階段で上下をつなぎ、生活空間を部屋の外へ拡張する。また土の内部を削り、薪風呂や暖炉、キッチンなどの機能を備え、土柱は家族が集まる媒体的な存在になっている。
土のぬくもりと風とともに家族がお風呂や暖炉を囲んで楽しい時間を過ごし、お互いの心を支え合いながら、このコロナ禍の時代を過ごす。

審査委員講評

この作品を見たとき真っ先に思い浮かんだのが、アフリカ西部の国・マリの世界遺産ジェンネの旧市街、泥で作られた巨大建築群でした。
しかし、独特の世界観で描かれた間取り図、立面図のイラストを眺めていると、小さい床面積ながら縦方向に広がる見事なスキップフロア空間が見て取れました。暖炉で暖められた空気が家全体をめぐり、心安らぎます。